

なぜ今、住まい相談が必要か

高齢化が進む地域では、介護だけでは拾いきれない住まいの課題が増えていきます

北九州は高齢化が進行

- 人口の約3人に1人が高齢者
- 住まい・相続・生活支援の相談が今後も増える前提で考える必要があります

単身高齢者が増える

- 高齢者単身世帯は2000年から2020年で1.7倍
- 家族が近くにいない相談が増えています

住まいの出口が複雑化

- 施設入居・空き家・住み替え・相続・家財整理など、専門領域が重なります

介護・福祉の現場では、住まいの悩みが「雑談」や「ふとした相談」として出てきます。その場で解決しようとせず、安心してつなげる相談先があることが大切です。

すまいと = 住まい相談等を受け止めて、適切な先へつなぐ入口

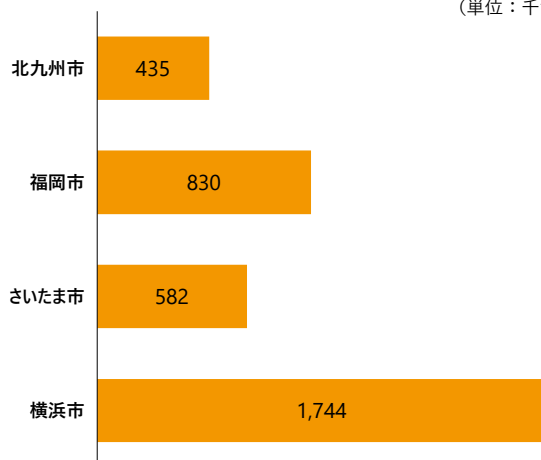
出所：北九州市「北九州市の高齢者を取り巻く状況」等を基に作成

北九州市の世帯数（利用者側）

北九州市は他の政令指定都市より一般世帯数は少ないものの、シニア層の夫婦世帯や単独世帯割合が多い傾向が見られます

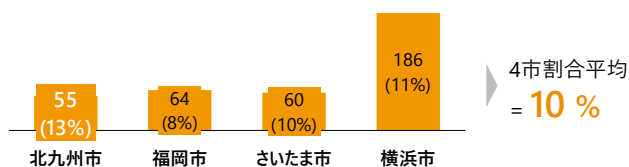
北九州市等の一般世帯数（調査年：2020年度）

（単位：千世帯）



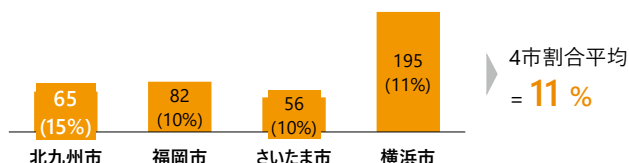
北九州市等のシニア層の世帯数（調査年：2020年度）

夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみの世帯数¹⁾（単位：千世帯）



1) 割合=夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみの世帯数/一般世帯数

65歳以上世帯員の単独世帯数²⁾

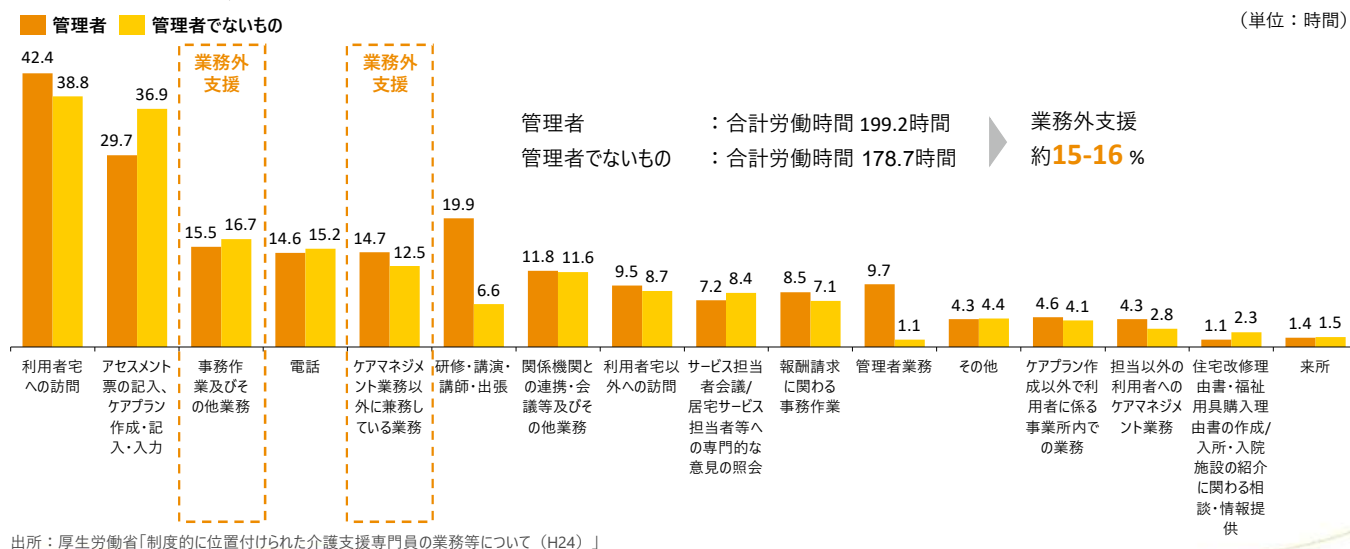


2) 割合=65歳以上世帯員の単独世帯数/一般世帯数

出所：政府統計の総合窓口(e-Stat)「住宅・土地統計調査」

ケアマネの業務実態（介護者側）

ケアマネジャーは管理者・非管理者のいずれも、業務実態として事務作業や業務外支援に約30時間（合計労働時間の15～16%）を費やしています



現場で起こりやすい相談

不動産だけでなく、終活・相続・家財整理など広範な内容で利用者より介護者にご相談されております

Case 01 不動産売却

- ・施設入居に伴い自宅をどうするか

Case 02 住替え

- ・在宅継続が難しい
- ・施設入居後の住まい

Case 03 生前整理

- ・荷物が多い
- ・どこから始めるか

Case 04 相続・遺言

- ・名義・遺言・相続前後誰に聞くべきか

現場の負担を減らすための考え方



- ・「詳しく説明する」「解決先を判断する」等の対応は必要はありません。
- ・相談が出た時、「すまいと」へつなぐだけ。その後は当社で対応いたします。

ご相談から対応までの流れ

現場で受けた相談を、LINE・電話でミクニにつなぐだけ。住まいの相談を気軽に問い合わせください

相談の発生

- ・利用者様・ご家族から、住まいに関する不安や困りごとが発生

連絡先をご案内

- ・チラシ・LINE・電話併走をご案内いたします
- ・現場で内容判断せず、お問い合わせください

ミクニが初期確認

- ・担当者が状況を確認し、何から進めるべきかを整理します

対応・専門家連携

- ・ミクニにて対応、または終活あんしんセンター登録事業者等へ適宜連携し、ご相談にお答えします

すまいとは、介護・福祉現場の負担を増やすものではありません。
「住まいのことならミクニに相談できます」とつないでいただくための入口です。

配布チラシ・相談動線

オレンジ版チラシを、ケアマネジャー・ヘルパー等の現場で案内しやすい資料として活用します



目的

困りごとを聞いた時に、「ここに相談できます」と自然に案内できる状態をつくります。



現場の使い方

説明しなくても大丈夫。チラシ・LINE・電話番号を案内するだけで入口になります。



ミクニの役割

住まい相談を受け止め、必要に応じて外部専門先へつなぐ一次窓口になります。